エムブリオマシン～レジスタンス戦記～

鴉～夢の運び屋～

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
エムブリオマシン～レジスタンス戦記～

【Ｎコード】
Ｎ９２７１Ｏ

【作者名】
鴉～夢の運び屋～

【あらすじ】
かつて『大退行』と呼ばれる事件が世界を大きく変えた。技術力の大幅な衰退、文明レベルでの退行遅延。そんな状況下でも、人間は力強く個々人の力を表そうとしていた。
ここはウィスタリア王国、その端からレジスタンスは侵攻を開始する。この物語は、レジスタンスの面々が繰り広げる様々な方向や時間で区別したお話である。レジスタンス組織は、その力を誇示し国をより良い方向へ変えていけるのだろうか。
判定時のダイスは、実際に振って出た数字です。要はリプレイみた

いなもの♪そんなかんじでお話は進行して行きます。楽しむもよし
罵るもよしな作品です。

ｓｅｓｓｉｏｎ１－１　チーム［パトリオット］

ここはウィスタリア王国の外れにある主要都市「メディスン」ここでは、銀の貿易が成功していてそれなりに栄えている街だった。しかし、ウィスタリアの腐った魔の手はこの場所までも腐らせようとしていたのだった。

「・・以上が、今回の抵抗運動の内容だ。」
「了解しました。『パトリオット』はこれより、軍事テント強襲戦の任務に向かいます・・」
ここ、ウィスタリアは腐っている。無能な貴族たちが国を治めて好き勝手放題にやってくれて、お陰で他の国からの侵攻を許しかねないとも言われているほどだ。そんな王国を、変えようと思わない奴が居ない訳が無い。我々パトリオットは、そんな国を変えてやりたいと思っているレジスタンス組織『グングニル』のメンバーなのだ。規模は軍の４個中隊程しかないが、正規軍に負ける筈が無いと私たちは自負している。何故なら、ここの正規軍はどうしようもないほどに錬度が低い。要は資質が足りていないのだ。

「さて・・・この後どうしよっかな♪」
彼女の名前はヘレナ・トンプソン。パトリオットでコードナンバー『Ｐ１』つまりは隊長を務めている１９歳の女性である。眼鏡をしていて気真面目そうに見えるが、この眼鏡はエムブリオマシンのキーとなっているので眼鏡は関係ないのだ。本当の彼女は、そこまで頭も働かないし異常なほどまで賢い訳でも無い普通の女の子である。

「隊長？今回の依頼はどちらなのかしら？」
この、まるで何処かのお嬢様の様に離しかけて来た少女はフォニカ・レイリア。『Ｐ２』のコードネームを持っているれっきとしたパト

リオットのメンバーである。その後ろには、もう二人の人物の影も見える。

「おっす！隊長？今回の仕事は何なんだい？」

「・・・私も聞きたい・・」

喜作にヘレナに話しかけて来た少年の名前はホムラ・フレイル。『Ｐ３』のコードネームを持つれっきとした戦士だ。その隣で、無表情で同意に意を示したのはアスナ・リスター。『Ｐ４』のコードネームを持つパトリオットの最後の一人である。

「今回の仕事は、この街からそう遠くない所に設営されている国軍テントの襲撃です。内容は良く知りませんが、どうやら国軍の機体の流れ弾が民間人に被弾しているそうです。」

「うわっ、ひでえな・・」

「相手は人間なのですか？そんな事をしておいて・・」

此処で判定が出ます。目標値は７です。　結果：８＋７＝１５で成功

暫く四人で話し合っていると、直ぐ隣を包帯で体を巻かれた人が担架で運ばれて行きました。焦げくさい所を見ると、どうやら火事に会ったようです。しかし、それにしては焦げ臭さが身に付きます。

「この匂いは・・・・ＥＭ（エムブリオマシン）の火薬の匂いですわ！」

フォニカの言っている事は正しかった。すると、そのフォニカが何かを足元で蹴った事に気が付きます。それを拾ったフォニカは、少し顔色を変える事になります。

「・・？それは・・・って！ＥＭの弾丸の欠片か？！しかも形がウチの軍だ・・」

ホムラの言っている事に間違いは無かった。形も直ぐに判別できる

ほどに形が整っていた。紛れも無くそれはウィスタリアの正規軍が所属しているＥＭに配備されている鉄鋼弾だった。

「・・・戦う・・」

そう言ってアスナは強く握りこぶしを作ると、改めて敵に対する怒りを露にして見せた。そして全員がコンテナに置いてあったＥＭに乗りこむと、全員が通常起動（ほとんど燃料を使わない状態）で起動させて指示されたポイント目指して出撃して行った。

ｓｅｓｓｉｏｎ１－２　バトル前［パトリオット］

任務を受けて街を出発してから、１日が経過する頃になると目的の場所がはるか遠くに見えて来た。正規軍の設営テントだ。現在パトリオットの面々は、目的地から約２ｋｍの所でＥＭを止めている。それは何故か。

「くっそ！なんであんな平地にテントなんざ貼ってるんだよっ！」そう、テントが張られている場所は平地ばかりで隠れて進めそうな場所が見当たらなかったのだ。しかも此処から程ない所を数機のＥＭが訓練なのか通常運転で稼働している。どうやらまだ見つかってはいないようだが、いつ見つかるかは時間の問題になって来ていた。

ここでダイスを振って下さい。目標値は１０です。　８＋４＝１２で成功♪

ホムラとヘレナが、腰に引っ掛けておいた望遠鏡で覗き込んだ結果、正規軍は先程まで模擬選でも行っていたのか武器の換装やら修理改修やらで動ける機体がそこらをトロトロと歩いているＥＭ３機だけだと言う事が判明しました。これならば十分に勝機はあります。

「よし！みんなはＥＭで敵に見つかるぐらいまで接近したら各自で戦闘起動して応戦！なるべく早く片付けてテントをぶち壊すわよ♪行ける？」

ヘレナの問いに、全員が了承の意を示してコクピットへと乗り込んだ。どの機体も人一人＋αが入るかどうか程度の大きさだ。その中にいろいろな精密機器などが詰め込まれている。

「ヘレナ機、パンツァー！出るわよっ！」

一番最初に茂みを抜けて飛び出したのは、スピードのあまり出ないヘレナの機体だった。その大きさはＬサイズ、重量は重量級だった。所謂「頑丈さと暴力加減が取り柄」の機体コンセプトである。

「Ｐ２、フォニカ・レイリア！プトレマイオス、テイクオフですわ♪」

その後を追いかける様に飛び出したのは、バランスに富んでいて色々な戦い方の出来る機体に乗っているフォニカだった。彼女の機体はサイズがＭサイズ、重量が中量級と言うどうにも中途半端な、だがバランスに富んだ機体コンセプトをしている。事実、彼女はまだ結成されたばかりのパトリオットの中でも屈指の削り役である。

「Ｐ３、ホムラ、パシフィックで出る！」

次に飛び出したのは、スピードと回避を生かして戦場を掛けるホムラだった。しかも彼は、ＥＭに乗っておきながら余裕の表れから足だけで操縦桿を動かしていた。それでもきちんと歩いているのだから、ホムラの腕も一流に近い物を持っていると窺い知れる。

「これを使って・・・（プシュッ）んっ・・・Ｐ４、パンドラ・・アスナ・リスター・・・出ます・・・」

コクピットの中に置いてある箱の中からプッシュタイプの注射器を取り出したアスナは、それをそのまま自分の肩に突き刺した。すると薬が見る見るうちに吸収されてあっという間に空になると、アスナの目つきが鋭いものに変わった。そして、彼女の格闘も狙撃も出来てしまう万能タイプの機体が茂みから飛び出した。これで全員が出撃した事になります。

ここでソルジャー適性を使ってダイスを振ります。目標値は１６です。

フォニカ　適正１＋６＋４＝１１　失敗

ホムラ　適正３＋１０＋７＝２０　成功
アスナ　適正１＋１０＋１＝１２　失敗

幸いにも、準備運動をしているＥＭ隊は反対側の約２ｋｍ遠い場所にいるようです。この距離差ならばテントを破壊し尽くせば彼らが到着する程度の距離になっていた。

「おらおらぁ！死にたくなけりゃテントから出て行くんだなぁ！」早速テント群の設営されている場所へと突撃を掛けたホムラは、スピーカーで警告を促すと同時に空中に向けて石を投げていた。何をするのかと思えば、それを落ちて来た所で頭部のミドルレーザーで撃ち抜いた。それを見た正規軍の面々は、まるで脱兎の如く逃げ脚でテントの周りから去って行く。そして全員が次の仕事へと取り掛かった。

「今度はコイツね・・・みんな、ごめんね・・・」そう言うとヘレナは、パンツァーのブレードでＥＭを切り刻んで解体して行った。その数は実に３機分。そして、幾つかの部品を奪取したヘレナは、そのまま皆と一緒に外へと出た。

「・・生体反応無し・・・行けっ！」コクピットに備え付けられている人感センサーに何も無いのを確認したアスナは、パンドラのランスを横に薙いでテント群を薙ぎ倒して行った。

「皆様っ！敵が来ましたわよっ！」見張りに徹していたフォニカが、唐突にスピーカーを使って叫んだ。その音は非常に大きく、少し向こうから向かってくる敵にも聞こえていた。そして、パトリオットの戦いが始まる。

ｓｅｓｓｉｏｎ１－３　戦闘開始♪［パトリオット］

まずは地形の説明からして行こう。ここはロッケル平原のど真ん中に位置している。そして、敵の情報は機体がアラクネと呼ばれる珍妙な形状の機体が２機と、ベルギュロスと呼ばれる万能型の機体が１機だった。

１ラウンド目　１セグメント目開始！

「はぁっ！」

真っ先に動いたのは一番最初に動きだしていたヘレナだった。しかし、機体の重量に難が在ってそこまで移動は出来なかった。結果、彼女の機体はＤ－１２で足を止めた。その頃、フォニカ達も有意義な移動を行っていた。下の通りだった。

フォニカ：Ｅ－８
ホムラ：Ｉ－９
アスナ：Ｇ－７

の位置に移動している。因みに相手の移動位置は

Ａ１：Ｆ－６
Ａ２：Ｉ－８
Ａ４：Ｊ－５

だった。これでは近接格闘戦ばかりを強いられる形になってしまう。しかし、それはお互いに臨むところだった。事実、行動を終えたユニットはみな、近接武器を構えている。次の動きで全員が仕掛けるつもりだ。それは、パトリオット側にとって好都合以外の何物でもなかった。

１ラウンド　２セグメント目開始！

「この時を・・待ってたぜぇ！」

最初に攻撃に出たのは、敵機と隣接しているホムラだった。彼は右腕に装備してあったヒートソードで、隣に居て移動タイミングで動かなかったＡ２を攻撃した。

相手回避値７＋補正無し＝目標値７　１０＋６＝１６－７＝９　成功　Ａ命中で２０点　８０－２０＝６０　残り６０点

相手側の機体の『短距離ミサイル』が被弾して発火した。そして自動パージした相手は、半狂乱気味に体を揺すっている。どうやら悔しさで中のパイロットもイライラしているようだ。挙動を見るだけで、大抵の気持ちの持ちようが分かるもの。それが、エムブリオマシンである。

「私も、皆を守りたいから・・」

そう呟いたアスナは、頭部に装備している『高圧縮レーザー』を用いて、武器を構えて動かないＡ１を狙った。コックピットにある操縦桿の、頭部武装のスイッチを押して発射する。ただそれだけだ。

相手回避値７＋補正無し＝目標値７　１＋９＝１０－７＝３　成功　Ｂ命中で１８点　８０－１８＝６２　残り６２点

相手側の機体の『シールド』が、関節部分を焼き切られて千切れ飛んだ。それを見た敵は、機体に何かをさせようとしていたが、何も起きずにそのまま次へと行った。

「こんな奴ら如きにこれを使うのは勿体無い気もしますけれど・・・えいっ！」

相手を完全に見下しているフォニカは、何の戸惑いも無く一つ離れているＡ１へ左腕の『ヒートソード』で切りかかった。相手が怯えているようにも見えたが、そんな事で力を緩めるほどフォニカは他人に優しくなかった。寧ろフォニカの表情は、楽しみを喰らっているかのように歪んだ笑顔をしていた。

相手回避値７＋補正無し＝目標値７　４＋４＝８－７＝１　成功
Ｃ命中で１６点　６２－１６＝４６　残り４６点

相手側の機体の『バーニア』のタンクに見事に命中。それが元で誘爆して機体側がパージして離れました。もう片方に積んでいるらしきバーニアは、これで使用不能となります。因みに、このバーニアは使おうとすると重量オーバーでオーバーヒートした後に炎上。そして燃料タンクに引火して爆発を起こし、１０点のダメージを受けることとなる。無闇に使おうとすると墓穴を掘ると言う訳だ。

「皆に負けてはいられないなぁ♪・・・はぁっ！」
機体の中でそれぞれの戦果を見ていたヘレナだったが、自分も動かない訳にはいかなかった。そして、彼女は左腕に装備させている『長距離ミサイル』で、Ａ１を狙い撃った。的確な狙いを定めたつもりのヘレナのミサイルは、綺麗な放物線を描いて目標へと飛んで行った。

相手回避値７＋最適射程外で＋２＝９　１０＋４＝１４－９＝５
成功　Ａ命中で１８点　４６－１８＝２８　残り２８点

相手側のコックピット近くに設置されていた『陸上機雷』が、弾丸を受けて暴発した。幸いにもその直前にパージしていた相手はなんともなかったが、これで機雷が使えなくなった。同時に相手は集中力が途切れたのか慌てて地面を掘っている。どうやら埋めようとし

ていた所を壊されてしまった為、慌てているようだ。

「・・・・来るっ！」

ヘレナの直感的な感覚は的中した。モニターを見ると、用意を済ませた相手がこちらに向かってきている。どう見ても準備に戸惑っている所を見れば初心者だと言うのは一目瞭然だ。こんな相手では不足してしまうと言うヘレナの気持ちも分かる気がする。近くでは各々の判断で、パトリオットのメンバーが動いていた。まず攻撃を仕掛けて来たのは、ホムラと隣接しているほど近くに居たＡ２だった。相手は、右腕部に備え付けてあったヒートソードの振動盤を回転させて発熱させ、ホムラのパシフィックに突撃してきた。

相手回避値９＋補正無し＝９　１０＋６＝１６－９＝７　成功　Ａ命中で２０点　６５－２０＝４５　残り４５点

「くっ！ミスった！こんちきしょぅ・・」

ホムラが条件反射で突き付けたスナイパーライフルが、いとも容易く斬られてしまった。使い物にならなくなったスナイパーライフルは、パージする事もなく炎上して自動パージされた。お陰で肩に積んでいるバレット弾薬が意味を持たなくなってしまった。次に動いたのはパンドラとほぼ隣接していると言える位置に居るＡ１だった。Ａ１は、左腕に備え付けてあるランスを使って、フォニカを攻撃してきた。

相手回避値６＋補正無し＝６　９＋６＝１５－６＝９　成功　Ｂ命中で１３点　８５－１３＝７２　残り７２点

「しくじりましたのっ！？こんな連中相手にっ？！」

Ａ１の攻撃はプトレマイオスの左肩を貫いた。しかし当たり所が良かったのか、そこはエネルギー弾薬の直ぐ隣で被害は何も無かった。

そのままランスは抜き放たれたが、肩の運用に支障は出なかった。最後に、Ａ４が右腕のスナイパーライフルを使ってプトレマイオスを狙い撃った。弾丸は、少しのブレを見せながらもプトレマイオスへと直進して行った。

相手回避値６＋有効射程外＋２＝８　２＋７＝９－８＝１　成功
Ｂ命中で１５点　７２－１５＝５７　残り５７点

「わ、わたくしばかり狙っていますの？！卑怯な・・・」
スナイパーライフルの弾は、ブレながら飛んではいたがちゃんとプトレマイオスに命中した。それどころか、当たり所が悪かったのか、ついさっきランスで貫かれた左肩の穴へすっぽりと入り込み、エネルギー弾薬のケーブルを貫いてしまった。これで一つエネルギー弾薬が切れた事になる。こうされるだけでフォニカの攻撃は制限されたも同然なのだった。

全員のプロットが終了しました。続けて、第２ラウンド　１セグメントを開始します。

「私はもっと一気に攻めた方が良いのかしら・・・」
「わたくしばかり狙って来て・・・捻り潰してやりますわ・・」
「隊長さん、足並みが揃ってないな・・・揃えて行こうか・・・」
「私が皆を守らなきゃ・・」
皆がそれぞれの思いを載せて、いまこの戦場に立っている。それは、紛れもない事実だった。そして、次の攻撃が幕を開けた。

「はあぁぁぁっ！」
最初に動いたのは、足の遅い筈のヘレナだった。パンツァーが、ズシンズシンと音を立てて地を蹴りあげながら敵に向かって走る。しかし、直ぐに動きは止まってしまう。様子見の為だ。

「沈める・・・」
次に行動を起こしたのはアスナだった。彼女は目の前まで来ていたＡ１にヒートソードで斬りかかった。ヒートソードは、その刃を的確に捕らえて振り下ろされた。向こうも同じ様な得物（ランス）を振り上げているが御構い無しだ。どうせ当たってもそれほどのダメージにはならないだろうと踏んでいたからだ。

相手（Ａ１）回避値６＋補正無し＝６　８＋９＝１７－６＝１１
成功　Ｂ命中で１８点　２８－１８＝１０　残り１０点

相手（Ｐ４）回避値５＋補正無し＝５　７＋４＝１１－５＝６　成功　Ｂ命中で１３点　９０－１３＝７７　残り７７点

「くぁ・・・大丈夫？パンドラ・・」
相手の突撃ランスをメインモニターカメラ（頭部）の直ぐ横に受けたアスナは、パンドラを心配して声を掛けた。勿論機械だから心が通じる訳ではないのだが、彼女曰く「自分の娘みたい」なんだそうだ。その娘の働きは偉大なもので、相手のＡ１は右腕部をヒートソードで根こそぎ持って行かれて、上手く起き上がれないでいた。ヒートソードには腕を斬り落とした時のオイルが血の様に流れている。

「おらおらぁ！邪魔だ退けぇ！」
怒りを露わにしたホムラは、ダメージによる間接的な痛みと精神的な屈辱に苛付きを覚えながらも、それを《八つ当たり》という正当な攻撃理由に仕立てあげてＡ２へと襲い掛かった。装備しているヒートソードを振り上げて、目の前で穴を掘っているＡ２に斬り付けた。

相手回避値７＋補正無し＝７　４＋４＝８－７＝１　成功　Ｃ命中

で１６点　６０－１６＝４４　残り４４点

「おっしゃぁ♪見たかぁ！」

ホムラの振り下ろしたヒートソードは、見事に胴に命中したが入りが浅かった為に傷もそこまで付きはしなかった。しかし、相手が反撃してこない所を見ると、これが罠だと咄嗟に判断して少し距離を置いた。

「打ち抜いて見せなさい！プトレマイオス！」

最後に銃を構えたのはフォニカだった。彼女はプトレマイオスの脚部に装備させているミドルレーザーを使ってＡ１を撃った。狙いは少々ずれていたものの、大概は予想通りの射線を通っていた。

相手回避値７＋補正無し＝７　４＋４＝８－７＝１　成功　Ｃ命中で１２点

「やりましたわ♪一機撃破致しましたわ♪」

彼女の目の前では、パンドラに攻撃を加えて引き返そうとしていたＡ１が轟沈して行く姿が映し出されていた。なんとも彼女にとって喜ばしい光景だ。機械が悲鳴を上げて自分に屈服すると言うのは実に心地よい。まぁ、攻撃を当てた箇所右腕部と、もうボロボロの所を貫いて沈めたのだ。それ以上の快感も覚えたと言うものだろう。それと同時に、相手側の動きが変わったようだ。味方が落とされたのを見て士気が落ちたのだろうか。

敵側の精神負傷が１段階悪化：ファンブル（致命的失敗）値が５へ変更されました。

「皆、気を付けるのよ・・」

ヘレナが心の中でそう思いながらも、敵は攻撃を仕掛けてくる。と

いっても、Ａ１は既に攻撃を終えて撃沈されているので、実質相手は二人になっていた。

Ａ２は先程から地面に穴を掘って何かを埋めているようだった。手際の良さから地雷だとすぐに分かったが、大まかな位置しか分からなかった。

Ａ４は再びスナイパーライフルで今度はパンツァーを狙い撃った。銃弾は、寸分違わぬ命中精度でパンツァーを捕らえて放たれた。

相手回避値３＋移動で４＝７　８＋１＝９－７＝２　成功　Ｂ命中で１５点　１０５－１５＝９０　残り９０点

「まだまだ、私たちはこんな事じゃ倒れないわよ？」

右腕を貫いた弾丸だったが、彼女のパンツァーは、そんなに柔では無かった。何も無かったかのように腕を庇って姿勢制御に徹すると、あっという間に元の状態へと戻っていた。ただ、右腕の風穴を除いてはすべて何処にも不調は無かった。

第２ラウンド２セグメント目開始！

相手側のアラクネとベルギュロスは、パトリオットの面々に怯えたのか機体を反転させて逃げようとしていた。もう挙動だけで分かるなんてものじゃない。機体の頭部が二体とも背後を向いている。どう考えても逃げる算段を考えているだろう。ここで取る行動は一つだった。

『待てええぇっ！』

全員の心が一致団結して、皆が移動を開始した。

Ａ２：Ｉ－２　Ｎ方面
Ａ４：Ｉ－１　Ｎ
Ｐ１：Ｄ－６　Ｎ
Ｐ２：Ｇ－３　Ｅ
Ｐ３：Ｊ－３　Ｎ
Ｐ４：Ｇ－１　Ｅ

に移動してセグメントが終わった。

第３ラウンド第１セグメント開始！

「囲んだっ！これで行けるわっ・・・」

ヘレナが、心の中でチャンスを見出すとそれを見透かしていたかのように全員が動き出した。本当に連携が取れたチームだ。敵側もそれに怖気づいて武器を無闇に振り回している。しかし、この程度の攻撃をかわして攻撃を打ち込むなど、皆にとっては造作もなかった。そして、まずはパンツァーが威力のある長距離ミサイルをＡ２目掛けてはなった。

相手回避値７＋補正無し＝７　６＋４＝１０－７＝３　成功　Ｃ命中で１０点　４４－１０＝３４　残り３４点

「さぁ！一気に追い詰めるわよっ！」

意気込んだヘレナは、握りこぶしを作って気合を入れなおした。相手の胴に近い場所で爆発を起こし、爆風だけでも喰らわせたヘレナはこうして自分のミサイル弾薬を撃ち尽くした。

「この程度の相手が、このわたくしを愚弄する事、許しませんわ！」

目の前で武器を無闇やたらに振り回しているのを見て、バカにされていると勘違いしたフォニカは怒りをぶつけようとミドルレーザー

でＡ４を狙った。

相手回避値６＋補正無し＝６　６＋８＝１４－６＝８　成功　Ｂ命中で１４点　８５－１４＝７０　残り７０点

「ほぉら！早く落ちやがれ！」

ホムラが、右腕のヒートソードでＡ２に斬りかかった。向こう側も同じ事をしているようで、ホムラにヒートソードを突き付けながら走ってきている。

相手回避値６＋修正なし＝６　９＋７＝１６－６＝１０　成功　Ｂ命中で１８点　３４－１８＝１６　残り１６点

相手回避値９＋修正なし＝９　４＋３＝７－９＝－２　失敗　体力そのまま

「はっ！ざまぁみろ！」

斬り付けて、それと同時にその場を離れて斬撃をかわしたホムラ。そして、相手は悔しそうに武器を振り回して必死に抵抗しようとしていた。

「とどめは私が刺す・・・」

ボソッと恐ろしい事を呟いたアスナは、右腕のヒートソードを使ってＡ４へ斬りかかった。どうやらＡ４も同じ事を考えているようで、同じくヒートソードで斬りかかって来ていた。

相手回避値６＋補正無し＝６　９＋８＝１７－６１１　成功　Ｂ命中で１８点　７０－１８＝５２　残り５２点

相手回避値５＋補正無し＝５　１０＋４＝１４－５＝９　成功　Ａ

命中で２０点　７７－２０＝５７　残り５７点

「きゃあぁぁっ！」
左腕の胴体近くにヒートソードの直撃を喰らったアスナは、コクピットの衝撃に体を浮かせてしまいそのまま機材に頭をぶつけてしまった。幸い、気絶したりはしなかったものの頭部からは微量の血が流れ出ていた。しかも、確認すると左腕のランスがもぎ取られている。

第３ラウンド第２セグメント目開始♪

「さぁ、終焉の幕引きよ？」
この戦闘もいよいよ大詰めへと指しかかった。後は、体力の削れている二体を完膚なきまでに叩きのめすだけである。

「早く倒れなさいよっ！」
ヘレナは、これで最後と言わんばかりに長距離ミサイルを放った。そのミサイルたちは放物線を描きながらターゲットであるＡ２へと向かって飛んでいく。

相手回避値７＋補正無し＝７　９＋８＝１７－７＝１０　成功　Ｂ
命中で１４点　１６－１４＝２　残り２点

「はやく倒れなさいっ！」
イライラしながらも、操縦桿の握る強さだけは変えないでいたヘレナは、相手の行く末を見守る事にした。もうＡ２はボロボロで、体を動かす時に響く「ギギギ・・」と言う軋む音がヘレナを嫌な思いにさせていた。

「お願い・・・倒れて・・・」

呟きながら相手に接近したアスナは、そのままＡ４へ胴体に備えていたバルカンを連射した。向こうは先程と同じくヒートソードで斬りかかって来ている。

相手回避値６＋補正無し＝６　１０＋５＝１５－６＝９　成功　Ａ命中で１８点　５２－１８＝３４　残り３４点

相手回避値５＋補正無し＝５　６＋３＝９－５＝４　成功　Ｂ命中で１８点　５７－１８＝３９　残り３９点

「うぅ・・・」

右足にヒートソードが直撃したアスナは、バランスを崩した時に頭に負荷が掛かって出血が再び少量ずつ流れ出して来ていた。しかしアスナの働きも上々で、相手も同じ右足からバルカンをもぎ取った。その時の衝撃で陸上機雷を壊してしまったが、それも戦果と考えれば微々たるものだった。

「死神はなぁ・・・血の匂いが好きなんだってよぉ！」

最早意味の分からない事を言いだしたホムラは、先程と同じようにヒートソードを使って今にも崩れ落ちそうになっているＡ２を襲った。しかし相手もカウンターを用意していたのか、ミドルレーザーでホムラを狙い撃っていた。

相手回避値７＋補正無し＝７　９＋５＝１４－７＝７　成功　Ｂ命中で１８点　２－１８＝－１６点　Ａ２轟沈

相手回避値９＋補正無し＝９　３＋６＝９－９＝０　失敗　体力そのまま

「当たらねぇ当たらねぇ当たらねぇ！」

ヒートソードで胴を叩き割り、なお且つ待ち伏せをかわして見せたホムラは、少々上機嫌になり過ぎていた。

「わたくしも負けては居られませんわ！せいっ！」

フォニカは、少し先で体をガクガクと震わせながら武器を無造作に振るっているか弱い戦士の姿を見て、それを倒す事に喜びを芽生えさせつつあった。そして、フォニカはラージレーザーでＡ４を攻撃した。因みに細かい射線軸をアスナが震える手で送り続けている為、多少の誤差修正に役立つ事が出来た。

相手回避値６－アスナの指揮＋２＝４　３＋８＝１１－４＝７　成功　Ｂ命中で１６点　３４－１６＝１８　残り１８点

「くっ・・・落とし損ないましたわ・・・」

物凄く悔しそうな顔をしたフォニカは、ラージレーザーの冷却準備に入った。といっても、ものの数秒で冷却は全て終わってしまった。

第４ラウンド第１セグメント目開始！？

「さぁ、オーバーキルと行きましょう？」

そのヘレナの一言には、ズタボロになったＥＭ達、そして何より仲間のアスナの傷付いたＥＭによって怒りに満ちていた。そして、彼女たちの怒りの猛攻が始まる。まず最初は、ヘレナが先陣を切って長距離ミサイルを放った。これですべての弾薬が尽きてしまったが、そんな事は問題では無かった。

相手回避値６＋最適射程外＋２＝８　８＋４＝１２－８＝４　成功　Ｂ命中で１４点　１８－１４＝４　残り４点

「次は・・私・・・」

息切れしながらも操縦桿を握っているアスナの表情は、少し辛そうな顔になっていた。可愛らしい童顔が台無しになってしまう。どうやら相手も狙っているようだ。

相手回避値６＋補正無し＝６　７＋４＝１１－６＝５　成功　Ｂ命中で１８点　４－１８＝－１４　Ａ４轟沈

相手回避値５＋補正無し＝５　４＋３＝７－５＝２　成功　Ｃ命中で１３点　３９－１３＝２６　残り２６点

「はぁ・・はぁ・・」

心神疲労し切っていたアスナは、とうとう操縦桿を握る力が弱まってきてしまった。しかし、相手も倒す事が出来た。上出来だろう。

「まだだ！まだおわらねぇ！」

「終わらせはしませんわっ！」

二人揃って、Ａ４へ攻撃を仕掛けた。ホムラはミドルレーザー、フォニカはラージレーザーだった。

（ホムラ）相手回避値６＋補正無し＝６　１０＋９＝１９－６＝１３　成功　Ａ命中で１６点　－１４－１６＝－３０　轟沈済み

（フォニカ）相手回避値６－アスナの指揮＋２＝４　１０＋４＝１４－４＝１０　成功　Ａ命中で１８点　－３０－１８＝４８　轟沈済み

大きな音と共に、Ａ４は倒れて動かなくなった。これで全部を倒した事になる。勝利条件を満たしてバトルパートが終わりを迎えた。次回に続く。

ｓｅｓｓｉｏｎ１－４　剥ぎ取り♪［パトリオット］

戦闘が完全に終了し、ボロボロの機体の中から操縦者を引きずり出して縛り上げたパトリオットのメンバー達。そして彼女等は戦闘後のお楽しみを迎えようとしていた。武器の奪取。所謂「剥ぎ取り」だ。

「えぇっと・・・・この子たちの武装はこんな感じだったわね・・」

Ａ１　頭：シールド　胴：陸上機雷［破損］・ミドルレーザー　左腕：スパイク［破損］・ランス　右腕：シールド［破損］・エネルギー弾薬［破損］　左脚：バーニア　右脚：バーニア［破損］

Ａ２　頭：シールド　胴：陸上機雷・ミドルレーザー　左腕：ロケット弾薬・短距離ミサイル［破損］　右腕：エネルギー弾薬・ヒートソード　左脚：ホイール　右脚：ホイール

Ａ４　頭：エネルギー弾薬　胴：バーニア・バーニア［破損］　左腕：ヒートソード・エネルギー弾薬　右腕：スナイパーライフル・バレット弾薬　左脚：ホイール・ランス　右脚：ホイール・バルカン［破損］

と、言った具合だ。因みにＥＭがＥＭを持ち帰ることは出来ない。何故なら、ＥＭがＥＭを運ぼうとすると重さに耐えられずに両腕が千切れてしまうからである。

「さぁて。最初はこのアリンコ２体の分だな。」

ホムラは早速解体作業に入った。しかし、あっさりとヘレナに止められてしまった。実は、ホムラは以前に解体作業中にＥＭの下敷きになりかけた事があったのだ。それを心配していたヘレナは、ホムラを止めて自分だけで剥ぎ取りに行った。因みにこの判定が行える

のは、メカニック適正値が3以上である事だ。よって、ヘレナ：3
フォニカ：0　ホムラ：0　アスナ1　の状況下において、解体作業が行えるのはヘレナだけとなっていた。

［A1］達成値無し。　6＋5＋適正値3＝14　2個奪取成功
選択：シールド・ランス

［A2］達成値無し。　2＋2＋適正値3＝7　奪取失敗　選択不可

［A4］達成値無し。　5＋2＋達成値3＝10　1個奪取成功
選択：スナイパーライフル

「ふぅ・・・この程度かしらね。皆、ごめんね・・・」
適当にスパナを振り回してバラしたヘレナは、EMに乗りこみ通常運転で起動させるとバラした部品を傷つけないようにそっと荷車に載せ始めた。3個とも載せ終わったヘレナは、そのまま荷車を押してその場を去って行った。

それから2日後、ここはそこそこに発展している街『ライアット』。ここに立ち寄ったヘレナたちは、一昨日の戦闘で剥ぎ取った武装を全て職人へと売り渡していた。ここの工場などは、他の所から依頼された武器の開発などを担当しているだけの事は有って慢性的な鉱物不足に陥っていたのだ。なので、鉄を多大に含むEMの武装は喜んで買い取ってくれるのだ。

「お嬢ちゃん！久し振りだな。今日も売却か？」
「ええ。でも、今回はあんまり取れなかったから数は少ないわよ？」
「良いってことよ！眼鏡掛けた美人な姉ちゃん＋上品そうなお嬢様＋護衛役とかやってそうな兄ちゃん＋無口そうなお嬢ちゃん。これだけの客がウチに来てくれるだけで、ウチの売り上げとやる気は1

４０％まで上がるってもんだぜ！」
ヘレナたちがやって来たのは、町工場を取り仕切っている一番大きな工場だった。そこで受付をしていたのは、たまたま非番をしていたここの親方、［ガイル・ドゥロ］だった。彼は腕利きの職人で、今まで幾つもの優秀な武器を製造している。中には軍に正式採用された物さえある。そんなガイルは、受付で他愛ない会話をした後ガレージで武器を買い取った。

シールド［Ｂランク武装］　買い取り価格：カルディア鉱石５単位
ランス［Ｂランク武装］　買い取り価格：カルディア鉱石５単位
スナイパーライフル［Ｂランク武装］　買い取り価格：カルディア鉱石５単位
合計５＋５＋５＝１５　カルディア鉱石１５単位

「すまねぇな。これだけしか出せなくて。」
「良いですよ。何より買い取ってくれる事が助かるんですから。そういう意味ではガイルさんの事、私好きですよ？」
「嬉しい事言ってくれるじゃねぇか！どうせ暇だろ。飯でも食ってけ！」
「う～ん・・・それじゃ、お言葉に甘えて♪」
カルディア鉱石を袋に詰めてもらって受け取ったヘレナたちは、ガイルに呼ばれるがままに食事に御呼ばれされた。そして皆で楽しい団欒を味わった後、ヘレナたちはガイル達町工場の人たちと別れて宿屋へと向かった。因みにＥＭはガイル達に修理してもらっている。この点に関してもガイル達町工場の人たちは気を廻してくれる。機体が傷付いていたりしたら、彼らは喜んで機体を治してくれるのだ。それも、「新人の研修も兼ねてるからそれで無しって事で」と言っていつもタダで直してくれている。感謝してもし切れないほどだ。
「いやぁ、やっぱガイルのオッサンの飯はうまかったなぁ♪」

「そうですわね。わたくしもまた、此処に立ち寄った際にはガイルさんの所に立ち寄りたいですわね。」
「・・・ごちそうさま・・（↑12回目）」
特に迷う事もなく適当な所で宿を取ったヘレナたちは、借りた一室に入るとそれぞれがまずは自分の寝るベッドを決めた。部屋には3つベッドが設置されている。そして位置取りを決めた結果こうなった。

ヘレナ：他の物と比べて少し大きい、部屋の一番奥にあるベッド（ダブル）
フォニカ：部屋の壁側に設置されている平均的なベッド（セミダブル）
ホムラ：部屋の入り口からほど近い場所にある、少し小さなベッド（シングル）
アスナ：ヘレナと同じベッドで寝る

「さてっと、俺は先に風呂入って来るよ？」
ちゃちゃっと荷物を降ろして、中から着替えや入浴セットを取り出した。そしてホムラはそのまま持つ物だけ持つと、直ぐに風呂へと直行して行った。此処の旅館は温泉がウリで、なにより効能の多さで客の目を引いていたのだ。疲労回復、滋養強壮、消毒治癒、揚げ句の果てには合格祈願まで有るらしい。

「それじゃ、私たちは後で入りましょっか♪」
カバンの中から色々な着替えや日用品などを引っぱり出したヘレナは、同じように用意をしていたフォニカと隣で用意の手伝いをしていたアスナにそう言うと、カバンの中からおやつらしき物を取り出して口の中に放り込んでいた。

「飴玉・・・・そんな物を買っていらしたんですの？」

「そんな物とは失礼ねぇ。飴玉は、大退行が起こる以前から製法が変わっていないと言われるとっても特殊な駄菓子なのよ？それをそんな物扱い・・・食べてみたら分かるわよ！」
なんだか二人の間で飴玉争論が巻き起こりそうになっていたが、その嵐はヘレナがフォニカに渡した一つの飴玉によって全て無事に終わった。

「・・・美味しい・・・」
「でしょ？まだまだ沢山・・・あれ？もうこんな時間？お風呂行こ？」
口の中に飴玉を放り込んだフォニカは、その美味しさに呆然としてただ一つの感想を述べた。因みにフォニカが好きな物は酸っぱい物で、ヘレナが渡した飴玉も『偶然』レモン味だった。そして、飴玉についての論争が終わってフォニカが飴玉に興味を示し始めた頃、ヘレナはニコニコして袋の中を探っていたが時計を見てそろそろかと思ってしておいた用意を手に、いざ温泉へと向かった。

一方、ホムラはと言うと・・

「はあぁ・・・やっと浸かれたぜぇ・・・たくっ、何なんだよ。時間制入れ替えって・・」
ホムラはそう愚痴りつつもやっと待ちわびた温泉へと浸かった。なぜホムラが今になって入っているかと言うと、実は、ホムラが来た時間帯はギリギリ女湯の時間だったのだ。そして案の定、女性たちの悲鳴を聞きながら飛び出したホムラは、近くに置いてあったクレーンゲームで一儲けしながら時間を潰した後で入っているのだ。

「それにしても・・・俺以外に誰もいないなんて、何か外であったんじゃ・・」
「それでね？この前なんか私のポケットがね？」

「?!?!!?」
ホムラは不思議に思っていた事が有った。それは、ホムラ以外には誰もこの温泉を使っていないと言う事だった。いくら時間だからってこれは少なすぎる。そう思っていたホムラは、事件の可能性を感じた上で風呂を上がって様子を見に行こうとした。しかし、その直後に入り口の扉が開く音がして次に数人の聞き覚えのある女性の声が聞こえて来た。慌てて風呂に深く浸かったホムラは、訳も分からずただただ混乱しているだけだった。

「おっ?誰もいないみたい♪私たちが一番乗りだね。」
「わたくしの持参しているボディソープが切れそうですわね・・・」
「私の・・・使う・・?」
「・・・・(パトリオットの皆かっ!)」
ホムラが、岩で隠れているスキマから覗き見た光景。それは、湯気で隠れて少し見えづらいが間違いなくパトリオットのメンバーだった。女性らしいスマートな体つき。長い髪が優雅に揺れる。はっきりと分かってしまうほどに見える位置に居るヘレナ。手入れの行き届いた髪が彼女の背中で踊る。体は少し貧相だが、それに勝る美しさ。そこまではっきりとは見えないが、そこに居るのは間違いなくフォニカだ。そして、早速ヘレナにその肩まで伸びた髪を洗ってもらっている女の子がアスナだ。そしてホムラは見つかった気がして焦って潜ってしまった。これでは息が続く気がしない。

「それそれぇ♪」
「・・・!・・・誰か居るんですの?」
「・・・えっ?」
「ボゴボゴ・・・(まずい・・ばれたか・・)」
ヘレナは、アスナの髪を洗うのを徐々に遊びにし始めていた。その域まで来ると流石に痛みを感じるようになってしまったアスナは、少しばかりだけ顔を顰めた。その頃、体を洗い終えて湯を被ってい

たフォニカは、温泉の向こう側かわ走る妙な水の波紋を見つけた。そう。その波紋を作っているのは紛れもなくホムラだ。波紋でばれてはいけないと思って動かなかったのに、今度はその所為で見つかりそうになってしまった。

ソルジャー判定で判定します。目標値は１３です。ホムラソルジャー値：３＋２Ｄ＞目標値で成功
ソルジャー適性３＋１＋７＝１１　失敗

ホムラは、フォニカ達から逃げれると思い、フォニカが入ってきた方向と逆側から逃亡を図りました。

「あっ・・・・」
「あっ・・・・」
「あっ・・・・」
しかし、進行方向にはヘレナとアスナが居た。そして湯気が風に流されて、ホムラ側はヘレナとアスナの体がはっきりと見え、ヘレナたち側は相手の顔がはっきりと見えてしまいました。

「・・・・・・・変態・・」
一瞬固まっていた空気だったが、アスナが放った一言で全ては動きだした。凍りついたようにも感じられたホムラは、全ての終わりを悟った。チームの皆との決別、力も無いままに一方的に痛めつけられる、そして自分の命が終わりを告げる事を。

「・・・・で・・出てってぇ～～っ！」
「ちょっ！今此処は男湯・・ぐほあっ！そ・・それにその位置から投げられてたら出られｎ・・あべしっ！」
一拍の空気の絶対零度が流れた後、ヘレナは顔を真っ赤にして手当たり次第にホムラに物を投げつけた。良い訳をしてどうにかやり過

ごそうと思ったホムラだったが、言葉が終わる前に風呂桶や風呂椅子が飛んできてホムラの頭を命中していた。そして、3～4発頭頂部に直撃した頃にもなるとホムラは鼻血を出して湯船に浮かんでいた。そしてピクリとも動かない。

「・・や、殺ったの・・？」

「そういえば、男湯がどうとか言ってましたわね・・・」

「・・私が見てくる・・・」

物を投げるのを止めたヘレナは、息を荒げていた。そしてピクリとも動かないホムラを見つめて少し怖い予想を立てていた。そして、フォニカはホムラの言っていた事を思い出す。それを勘付いたアスナが、急いで温泉の入り口の所へ向かう。

「そういえば・・・・言ってたわね。男湯がどうとかって・・」

「そうですわね。このままだとわたくし達、単なる変質者になり下がってしまいますわ。」

「あわわわわ・・・ここ、今は男湯だそうで・・キャッ！」

ヘレナとフォニカは、現在の状況をどうにか掴もうと話し合っていた。しかし、その話し合いは直ぐに終わった。いつもはクールで無口なアスナが、珍しく慌てて走って来たのだ。それによるとどうやら此処はホムラの言う通り男湯だそうで、悪いのはヘレナたちだと分かった。しかし、その直後にアスナが石鹸を踏んで足を滑らせて転んだ事によって緊張感がサッパリ無くなってしまった。

「・・・・・・プッ・・・アハハハハハッ」

「全く・・・何を・・ププッ・・してるんですの？」

「イタタタ・・・ハッ！・・・・／／／／」

一瞬言葉が止まってしまったヘレナだが、急に吹き出すと笑ってしまった。フォニカもどうやら笑いを堪えているらしい。平静を装おおうとはしていたものの、腹を抱えて限界が近そうだった。そして

転んでしまったアスナはと言うと、滑って打ち付けた部分を撫でて痛そうな顔をしていたが急にハッとなって撫でるのを止めると恥ずかしくなってしまった。そして、ホムラを残したまま風呂を出て行ったヘレナたちはそのまま自分の部屋まで笑いをこらえながら戻って行った。それから数分後、湯船で浮かんだまま動かないホムラが風呂場の清掃員［女性］に見つかった。そうしてパトリオットは面白可笑しな今日を過ごした。

ｓｅｓｓｉｏｎ１－４　剥ぎ取り♪［パトリオット］（後書き）

今回で［Ｐ：パトリオット］編は一時中断です。
次回からは新編［Ｈ：ヒーラー］編をお送りします。

他のチーム名はあまり定着していません。何か良い案が有ったりする人は教えて下さい♪お礼？ありませんよ（キリッ

ｓｅｓｓｉｏｎ２－１　花園医療［ヒーラー］（前書き）

今回は、パトリオットとはまた違った部隊であるヒーラーを取り上げます。今回の注意点は２つ
一つ：メンバーが女性ばかり
二つ：受け取り様によっちゃ狂ってる

以下の事を了承のうえで黙読する事。ＯＫ？

ｓｅｓｓｉｏｎ２－１　花園医療［ヒーラー］

此処は発展都市［スレードファウゼン］。此処では様々な食材からなかなか市場に出回らないような発掘作業中の掘り出し物など多種多様な物が売り買いされている。そんな街の中に、女性だけで構成されたレジスタンス部隊が警備衛生兵として駐留していた。彼女たちは、今も診療所でそれぞれの仕事をこなしている。

「はぁ・・・（この都市に越してきて早２ヶ月。私の役立つ日は何処へ・・・いやいや、欲を出しちゃだめだよね・・）キャッ！」
「ちょっとクルリ！何してるの！罰としてそのひっくり返したバケツは自分で片付けな！分かったわね？」
ため息を吐きながら医療用ベッドを拭いていたナース、クルリ・アイサはヒーラーの戦闘戦略に置ける削り役とも囮役とも言える立ち位置にいる。そして何よりこの部隊のムードメーカーだ。その隣でクルリを叱りつけているのは、この部隊のリーダーにして、若干２１歳にして少佐という地位まで上り詰めている上位衛生管理官であるレイカ・ブランシアだった。レジスタンスと言っても統率の仕方は軍とあまり変わらず階級制度を取り込んでいる。因みにクルリは軍曹だ。まぁ、レジスタンス自体がそこまで大きな規模でも無いので、それなりになるまでの階級は皆一概にされやすい。

「あははぁ・・・私のお仕事って・・なんだったかしらぁ・・・」
「あわわわ・・リリちゃんがおかしく・・・元々だけど嫌だよぉ！うわあぁぁあん。」
開いている病室を掃除していた二人の少女だったが、その内の一人であるリリ・シェイラが雑巾をヒラヒラと漂わせて遊び始めてしまった。その様子に慌てていた少女、チェル・ブランシアはパニックでも起こしたかのように冷静と慌て様を繰り返した後には泣き出し

てしまった。姉のレイカ曰く「妹は可愛いから許すっ！（キリッ」だそうだ。

「アハハハ♪二人とも、昔とちっとも変ってなぁい♪私、二人と会えてホントに良かったよぉ♪」

このような慌ただしい病室に居れば、誰もが少し疲れるだろう。しかしここは空病室。誰かが来るようなことも無いだろうと思っていてはいけない。その忠告は現実の物となる。慌てていたチェルの背後には、現在は軽い喘息で短期入院しているチェルの友人にしてリリの元クラスメイト、そしてこの町スレードファウゼンの市長の娘であるリリル・スレードが満面の笑みを浮かべて立っていた。その表情は、苦しみを何もかも乗り切った後の清々しささえ感じさせるほどだった。

「おひさしぶりだったもんねぇ♪私たち。」

とっても明るい顔で笑顔を作っていたリリルに負けを取らない様にしてなのか、リリも明るい笑顔をリリルに返していた。リリとリリルが友人として付き合いだすようになったのも子供的な感覚からだった。元々名前の似ている二人は仲が良かったのだが、更に共通の友達が出来る事によって友人としての付き合いになりだしたのだ。

「・・・！・・・でも、リリルちゃんは寝てなきゃだめだよぉ。」

リリとリリルが仲良くお話していたが、途中で何度か口を塞いで咳き込むのを我慢しているのをリリは見逃してもチェルは見逃さなかった。すかさずリリルを病室に戻るよう言ったチェルは、たまたまリリルの病室のすぐ近くだった事も合って二人で見送った。そして、三人とも明るい笑顔で部屋の扉を閉じるといつも通りの業務に戻って行った。

「少佐殿に伝令！スレードファウゼン市街部にて、ＥＭ２機の起動

を確認。カルディア鉱石を強奪しながら近辺の住宅地を破壊して回っている様です。」
リリ達が楽しげにお仕事をしている中、一人の少女が突然事務用の扉から入って来た。内容によれば、賊か何かが街で暴れているらしい。１０分も待てば動けなくなるだろうと思っていたが、その後にカルディア鉱石を強奪していると聞いて待ってもいられなくなった。

「チェル！リリ！クルリ！仕事は一時中断。他の者に任せて出動よ。ＥＭに乗りこんで！」
「せ・・・戦闘怖い・・・（お姉ちゃんが付いてる！頑張ってやりなさい！）・・・うんっ！」
「りょ～か～い♪」
「合点だ。姉ｇ（その呼び方は止めろ！）・・・隊長。」
ホスピタルを信頼できる人間に任せたレイカ達は、そのままＥＭのある専用コンテナまで走った。そこまで距離は無い。だから到着するのも直ぐだった。そして、開け放たれているＥＭのコックピットにそれぞれ乗り込んだ。

「今回もよろしくね。私のハウンドレイジ。」
まず最初にＥＭに乗りこめたのは、一番最初に飛び出していたレイカだった。レイカのＥＭはＬＬサイズと特大サイズだが、彼女は少佐と言う地位まで上り詰めた女性だ。それなりの技量は持ち合わせていた。そしてレイカはハウンドレイジを通常起動で起動させると真っ先にコンテナを出撃して行った。とは言っても、レイカのＥＭは足が遅い。なので、すぐに皆に追いつかれるだろう。

「ちぇ・・チェル・ブランシア、キリング・・い・・出撃するっ！」
極度の緊張から声が上ずっていたチェルだったが、ＥＭの操縦桿を握ると口調が変わった。そして彼女のＬサイズ軽装甲の「当たらなければどうと言う事は・・」な機体が出撃して行った。体中にあら

ゆる種類の射撃武器を持ち合わせて。

「さぁて♪今日もばら撒くわよぉ♪リリ・シェイラ、エルフェン行きまぁす♪」

軽快な声音を上げて、リリはＥＭに乗り込んだ。そして彼女専用のカタパルトに足部位を固定させた。そして、クラウチングスタートの要領で勢いよくカタパルトを飛び出して出撃して行った。と言っても、通常起動で起動した訳なのでそこまで速度の出が良い訳も無く、直ぐに減速してしまった。

「やっと・・・やっと私の役立つ時が来たんだ。絶対に勝って見せる！叩き潰して終わらせる♪」

首飾りを弄りながらＥＭに乗り込んだクルリ。起動メタルが首飾りなのもあって、弄っている首飾りが光った訳だが今更ＥＭ乗りがそんな事を気にしている時間は無かった。そして彼女もまたコンテナから出撃して皆に追いついた。因みにそれぞれのＥＭステータスはこうなっている。

Ｈ１：ハウンドレイジ［レイカ］　耐久値：９５　サイズ：ＬＬ
重量：中　移動力：３　回避値：５
Ｈ２：キリング［チェル］　耐久値：７５　サイズ：Ｌ　重量：軽
　移動力：５　回避値：７
Ｈ３：エルフェン［リリ］　耐久値：６５　サイズ：Ｓ　重量：軽
　移動力：７　回避値：９
Ｈ４：トード［クルリ］　耐久値：８０　サイズ：Ｓ　重量：中
移動力：６　回避値：７

出撃から1分足らずで、目的地に到着した。周りの様子は宛ら宇宙人の侵攻にでも逢ったかのような乱れっぷりだった。チェルがＥＭのカメラ倍率を弄っていると、建物のスキマから何かが動いている

のが見えた。何とかして皆に伝えようとしていたチェルだったが、ＥＭの身振り手振りで精一杯だった。

「頼むから気付いてくれよっ！私らの力で此処を守るんだろうが！」操縦桿を握って、性格が豹変しているチェルは強気で攻撃的な口調で何としても伝わっていて欲しかった。すると、何かに気がついたのかそれともチェルのサインにに気付いてくれたのかレイカのＥＭの頭部から光モールスが送られた。それによると「建築物上にＥＭと思しき敵機を発見。発見者、チェルに感謝する。」との事。流石は姉妹と言った所か。お互いに通じ合っている気さえする。

「さぁ！戦闘起動で対応するわよ？皆、散開！」

レイカがモニターに映し出された味方機を見渡して、ＥＭの右腕を真横に広げた。これは簡単なサインの一つで「散れっ！」と言う事らしい。これは、軍隊でも使用されているサインの一種だったりする。そのサインを確認した各機は、少しレイカから離れて敵に近づいて行った。そして、戦闘が始まる。

ｓｅｓｓｉｏｎ２－２　強奪［ヒーラー］

攻める為に場所を移動していたチェルだが、途中で面白い物を見つけて拾ってみた。それは見た目的には人が使う道具じゃない事が明白だと分かるほどに歪な形をしている。

「これは・・・・・ＥＭ用の光学迷彩！あいつら・・・根こそぎ持ってトンヅラするつもりだなぁ。そりゃっ！」

チェルが展開しようとしていた時に見つけた歪な形をしたアイテム。それは、ＥＭが装着する工学迷彩装置だった。使用する粒子の希少性と、開発技術の低迷からウィスタリア公国では作られていないらしい。そうなって来ると敵の事も少し分かった気がした。要は燃料の強奪に来た何処かの国の軍か盗賊、あるいは傭兵だろう。現在の状況に置いて、傭兵で有る事が一番危険性が少なかった。傭兵ならば少しの金を積めばあっさりと引き返してくれるし、上手くいけば此方の手駒にもできる。その次に危険なのが軍の兵士だ。ここの軍の兵士ならば叩き潰して何の問題も無かったが、他の国の軍部には色々と事情が違う所が有る為ヘタに攻撃できなかった。それに、攻撃して相手が強い相手であっても困る。そして一番危険なのが盗賊だ。盗賊はその生業上なのかＥＭの操縦技術は傭兵よりも少しばかり上を行っている。しかも、軍の兵士ほどに規律も取れていない。そして一番厄介なのがＥＭを降りれば人質の確保に動くであろうからだった。それだけは避けたい事だった。その考えを一瞬で巡らせたチェルは、その事態を防ぐためにも掴んだ迷彩装置を握り潰した。少々勿体無い気もするにはしたが、これを機体が殴られた隙に奪われるのも厄介だったのでしょうがなかった。

「チェルちゃん、遅れてるわねぇ♪でも、わたしも遅れてちゃいけないしねぇ♪」

ＥＭに乗っても変わらずフワフワした口調を崩していないリリは、元々早いエルフェンを生かしながら活用してなるべく音をたてないようにしてＥＭに接近していた。そして、近くにＥＭが建物の中に腕を突っ込んで何かを物色しているのを見ていられる距離で待機した。その間にエルフェンに搭載してある録画機能に接続したリリは、普段のフワフワした態度とは全く違った手つきで手際よく戦闘の準備や証拠の記録を行い始めた。

「みんな、上手くやってるかしらね。私は私の事をするだけよね。さぁ、そろそろ戦闘起動にして戦うわ。これで・・っ！」
ゆっくりと相手に接近しているレイカは、皆の心配をしつつも相手との距離を測っていた。そして、相手が範囲に入った事を悟ったレイカは素早く右手の直ぐ横に置いてある薬箱に手を伸ばして手際よく箱を開いた。その中には、以前の話にも出て来たアスナも使っていたのと同じタイプのプッシュ式の注射器が数本入っていた。それを自分の太股に指して液体を注入したレイカは、少し表情が厳しくなったように思えた。そしてレイカは、尚も冷静にそしてゆっくりと敵へと迫って行った。

「あれ？あの機体・・・・何処かで見た事が有るような・・・・きゃぁっ！」
建物へとジャンプで昇ったクルリは、そのままの勢いで建物を何度かジャンプで飛び越えていた。その間ほとんど音が漏れていないのも全ては友人の開発技術の賜物だった。その友人と言うのは［マウリ・レイファ］というクルリの小さいころからの幼馴染だ。彼はレジスタンスでも屈指の開発技術を持っていて、月に二つは新発明を提出している。それも、そのどれもが軍部で使用されているパーツよりも幾分も使いやすく弄り易いとのことで色々な所から依頼を受けているのだ。そんな優秀な装備を身に纏っているクルリは、脚部のサスペンションに使用しており負担と稼働音の削減、そして脚部

運動性の向上を図っていた。お陰でジャンプして隣の建築物に飛び移るなどと言う芸当も出来ると言う物である。これが無ければ普通のＥＭだと屋上に穴を開けてしまって下の階へと落下。その衝撃音で敵に気付かれて運が悪ければ集中砲火を受けているだろう。そして、足を止めてＥＭの様子を覗きこもうとしたクルリだったが、遠くから何かが飛んできたのをセンサーが知らせてくれたのを感じ取ってその場を引こうとした。しかし、狙いはクルリではなかった。クルリが飛んできた何かを避けようとしたが、それが広範囲焦焔弾（ニトロナパーム）だと気付いた時には遅かった。その弾丸が着弾したと同時に、弾丸から数種類にも及ぶ液体が放出された。それは空気と結合すると化学反応を引き起こして爆発。建築物の一部を破壊した。その爆発に巻き込まれたクルリは、衝撃によってモニタに頭部を強打。血を流して気絶してしまった。そして、崩れた瓦礫にトードは埋もれてしまった。

「クルリィッ！ヤバい。あんな所にも敵が。こうしちゃいられない。」

チェルが叫んでクルリを呼ぶが、当然ながら返事は無い。そして、建物が崩れた事によって相手のＥＭも戦闘起動で戦うようだ。こうなっては仕方が無い。一番の最善策はＥＭに乗っていない状態で拘束する事だったのだが、これでその策は取れなくなってしまった。そして、敵が動き出して戦闘が始まる。

ｓｅｓｓｉｏｎ２－３　逃亡阻止（前書き）

勝利条件：
てきＥＭの全機機能停止、又は全機投降

敗北条件：
味方機体の全滅、及び敵機体のＳ端　（１４列目）到着

ｓｅｓｓｉｏｎ２－３　逃亡阻止

第１ラウンド　１セグメント目開始

思わぬ射撃を受けたクルリは、避け損ねた弾丸の爆風に巻き込まれて気絶。その上に爆発音で敵に気付かれてしまった。ここからは、待った無しの真剣勝負だ。それを自覚したうえで、皆は初期配置に付いた。

レイカ：Ａ－１１　Ｅ向き
チェル：Ｊ－１４　Ｎ向き
リリ：Ｄ－１４　Ｎ向き

Ｂ１：Ｅ－４　Ｗ向き
Ｂ２：Ｌ－１　Ｓ向き

「行くぜぇ！」
「チェルちゃんに敵機接近っ！耐えて・・」
「行かせない！」
先行して崩れ去ったクルリを置いて、全員は戦闘起動した上で略奪行為を繰り返していたＥＭに接近した。以下の通りに。

レイカ：Ｄ－７　Ｎ向き
チェル：Ｊ－９　Ｎ向き
リリ：Ｄ－９　Ｎ向き

Ｂ１：Ｇ－６　Ｓ向き
Ｂ２：移動無し

移動しなかったＢ２は、肩に背負っている大きなロケット砲を構えてチェルに放った。まるで計算していたかのように上手い事チェルの居る方向へ飛んで行ったロケット弾は、そのまま空を裂いてチェルへ迫る。

チェル回避値７＋移動補正＋４＝目標値１１　５＋１－１１＝－５
失敗

「当たるかぁ！」
覇気を纏って仁王立ちとなったチェルは、そのままロケット弾丸が飛んでくるのを待った。しかし、弾丸はキリングの頭部を大きく上回る位置を飛んで行き、近くの住宅地にぶつかって爆発を起こした。それでも頑丈なのか、建物は焦げ跡こそ付いている物の、破損個所は見受けられなかった。

第１ラウンド　２セグメント目開始

「先行しまぁす♪」
緩い口調で聞こえていないであろう二人に告げたリリは、敵の姿など見向きもせずに突っ走った。

リリ：Ｄ－７⇒Ｉ－５

「喰らいやがれぇ！腰抜けぇ！当たって爆ぜろ！」
次に、射撃タイミングで動いたのはキリング。チェルだった。彼女は少し涙目になりながらＢ２に狙いを定めてトリガーを引き絞り、左肩に積んである長距離ミサイルを放った。

敵回避値５＋最適射程外＋２＝７　６＋２－７＝１　成功　Ｃ命中で１０点　左腕に命中　９５－１０＝８５　残り８５点

「ちっ！カスった程度かよ！」
チェルは悪態を吐きながらテンポよくＥＭの制御に入っていた。
「これでも喰らいなさい！」
次に武器を構えたのはレイカだった。彼女は、少し遠い位置に居るものの支障が無かったＢ１をガトリングガンで集中砲火を掛けた。
敵回避値４＋最適射程外＋２＝６　６＋４-６＝４　成功　Ｃ命中で１６点　胴に命中　１００－１６＝８４　残り８４点
「掠ってどうするの？！悔しいわね・・」
相手の胴を掠める程度にしか当たらなかったガトリングガンを見たレイカは、少し自分の腕に苛立ちを覚えていた。敵側は、Ｂ１がリリを狙って銃を構えていたのだが、リリがＢ１の背後に周っていた事が幸いしてか、当たりそうにないと判断したＢ１はあっさりと武器を降ろした。一方のＢ２は何もしていない。未だに高い場所からレイカ達を見下している。
第２ラウンド　１セグメント目開始
「瓦礫がっ・・・邪魔・・だっ！」
チェルは、相も変わらず必死そうな形相で敵をただ只管に視界に捉え続けて接近して行った。彼女の闘争心は銃に向けられている物なのだろうか。しかし、彼女の行く手を阻むかのように幾つかの障害物があった。しかし、これを彼女はいとも容易く飛び越えて尚も接近して見せた。
チェル：Ｊ－９⇒Ｊ－４へ

「おぉ♪チェルちゃんも一緒の考えなんだぁ♪」
陽気に笑いながら、リリは表情を崩さないままＢ２へと近づいた。

リリ⇒Ｇ－６⇒Ｌ－４へ

人気者のＢ２は、どうやらリリを狙っていたらしいが動いた事により狙いが外れて諦めていた。

「うおぉぉぉぉぉっ！」
レイカは、ヒートソードの熱を帯びさせてＢ１へと接近移動（２まで移動可能）をしていた。その時ちょうど、向こうも向かって来たようで、刺し違えるような距離まで詰まっていた。

Ｂ１：有効射程外・攻撃不可能　移動：Ｇ－６⇒Ｇ－８
レイカ：敵回避値４＋補正無し＝４　４＋１－４＝１　成功　Ｃ命中で１６点　左足に直撃　８４－１６＝６８　残り６８点　移動：Ｄ－９⇒Ｆ－９

「またぁ？！でも、当たっただけ良しとしましょう。♪」
相手の攻撃を華麗にかわし、その上でヒートソードをめり込ませようと踏み込んだレイカ。しかし、彼女のヒートソードは相手の胴のパイプを一つ焼き切っただけに収まってしまった。そこから、両者ともに見切りを効かせるために間合いを開く。

第２ラウンド　２セグメント目開始

「いけぇ！高圧縮レーザーッ！」
このセグメント最初に動いたチェルは、胴体部分に繋がっているドでかいレーザー砲の砲門を開き、一瞬のチャージ時間の後にそれを放った。それは丁度良い位置に居るＢ２目掛けて飛んでいく。

敵回避値５＋補正無し＝５　７＋８－５＝１０　成功　Ｂ命中で１８点　右脚に直撃　８５－１８＝６７　残り６７点　右脚全壊！移動力半減！

「よっしゃぁ！」

高圧縮レーザーを見事に右脚に命中させたチェルは、思わずガッツポーズを取っていた。そして、レーザーの火線上から浮かび上がってきたＢ２は、右脚の下半分が焼き爛れて電気が走っていた。あれではもう、修理しなくては居ごくこともあるまい。

その後、Ｂ１・Ｂ２共に白兵戦武器を用いて攻撃に出た。

Ｂ１：敵回避値５－連続行動によって－２＝３　９＋３－３＝９　成功　Ｂ命中で２１点　胴に命中　９５－２１＝７４　残り７４点　未使用のエネルギー弾薬が破壊！

Ｂ２：敵回避値９＋補正無し＝９　６＋１－９＝－２　失敗

「きゃあぁぁぁぁっ！」

胴体部分にパイルバンカーを打ちこまれたレイカは、その衝撃で激しい揺れに襲われた。しかも不幸な事に、その衝撃とパイルバンカーの杭がめり込んだ事とが重なって、モニターの一部が死んでしまった。右半分が見えにくくなってしまっている。しかし、これでもまだレイカは諦めなかった。同じようなタイミングで、彼女はヒートソードを振っていたのだ。

敵回避値４－連続行動により２＝２　７＋７－２＝１２　成功　Ｂ命中で１８点　右腕に命中　６８－１８＝５０　残り５０点　ガトリングガンが両断！

「ふふっ・・・やって・・やったわ。」
不敵な笑みを浮かべたレイカの瞳には、ハウンドレイジに傷を付けたＢ１に対する怒りと憎悪が渦巻いているのが垣間見えるほどだった。

「これをこうして・・・ばら撒きぃ♪」
特に何もしなかったリリは、唐突に足元に円盤の様な物を落とした。

第３ラウンド　１セグメント目開始

「そぉら！もう一発喰らいなぁ！ちょっ！リリ！何してるんだ！」
チェルが、先程と同じように高圧縮レーザーのエネルギーを集めていると、リリがヘッドに付けているアンカーを使って敵に向けて発射した。この兵装は、ダメージを全く与えられない代わりに相手の位置を自分の真ん前に移動させる事が出来る。

リリ：敵回避値５＋補正値無し＝５　５＋６－５＝６　成功　命中　してもダメージ無し　Ｂ２強制移動：１－１⇒Ｌ－３へ　陸上機雷作動！Ｂ２に命中　ダメージ２０点　右脚に命中　６７－２０＝４７　残り４７点
チェル：リリの攻撃命中後：敵回避値５＋最適射程外で２＝７　７＋４－７＝４　成功　Ｂ命中で１８点　右腕に命中　ロケット弾薬が引火して消化！　４７－１８＝２９　残り２９点

「あらあらぁ、ごめんなさいね♪今度パフェ奢るから、それで許してね・・」
スピーカーを付けている訳でもないので聞こえていないと分かっていても、とりあえずリリはチェルに頭を下げていた。このコンビネーションは凄いと思う。しかし、その時の隙をついてなのかＢ２はラージレーザーをチェルに放った。

敵回避値７＋最適射程外で２＝９　２＋５－９＝－２　失敗

「うわっと！危なかった・・・」

間一髪でラージレーザーの射線から離れたチェルは、冷や汗を流しながら体のどこかで恐怖心を押さえこんでいた。その間に、Ｂ１は動きの鈍っていたレイカを襲った。

敵回避値５＋補正値無し＝５　４＋９－５＝１０　成功　Ｂ命中で１０点　右脚に命中　アンカーが圧し折れた！　７４－１０＝６４
残り６４点

「くっ！お願いよ、ハウンドレイジ！アナタの力、私に預けて。」

クローでの直撃でアンカーを圧し折られたレイカは、機体のバランスを保つ間にレバーを握って願いを込めた。

「はぁっ！」

レイカは、震える右手を抑えながらレバーの蓋を潰した。そして、Ｂ１がいる場所の傍に円盤状の物を投げ置いた。それは直ぐにＢ１が踏みつける事になり、陸上機雷が起爆した。

陸上機雷作動！　２０点のダメージ　胴に被弾　５０－２０＝３０
残り３０点

第３ラウンド　２セグメント目開始

「ぶっぱなしてやるよぉ！そぉれぇ！」

怒り心頭からＢ２以外眼中に入っていないチェルは、感情の赴くままにＢ２にガトリングガンを叩きこんだ。

敵回避値５＋補正無し＝５　７＋６－５＝８　成功　Ｂ命中で１６点　右腕に命中　２９－１６＝１３　残り１３点

「うふふっ♪これで・・・お終いよっ！（シュウン！」
ヒートソードでＢ２に斬りかかったリリだが、彼女の目からは生気が抜けているような感じがした。彼女は、学生時代に習った奥義的なもの、「交感強化」を使ったのだ。それによって、振った賽の目を、片方だけ０に変える事が出来る。しかし、敵もそこまで優しい訳では無く、ランスでチェルを刺し違えてでもダメージを与えようとしていた。

リリ：敵回避値５＋修正なし＝５　３＋３⇒３＋１０－５＝８　成功　Ａ命中で２０点　右腕に命中　１３－２０＝－７　Ｂ２撃沈
Ｂ２：同時判定：敵回避値７＋補正無し＝７　９＋５－７＝７　成功　Ｂ命中で１３点　右腕に命中　７５－１３＝６２　残り６２点

「かはっ・・・あんの畜生・・・こんな揺れ・・これが、戦闘だってのか・・・」
右腕にランスが突き刺さったキリングが起こした揺れに驚いたチェルは、そのままレバーで鳩尾をぶつけてしまった。

「はあぁぁぁぁっ！」
レイカは、馬鹿の一つ覚えとも思えそうなほどに何度もヒートソードでＢ１を襲った。対するＢ１も、同じようにパイルバンカーで対峙してきた。

レイカ：敵回避値４＋補正値無し＝４　１＋１－４＝－２　失敗＆ファンブル　右腕にＡ命中で２０点　バルカンが大破　６４－２０＝４４　残り４４点
Ｂ１：敵回避値５＋補正値無し＝５　８＋５－５＝８　成功　Ｂ命

中で２１点　右腕に命中　ガトリングガンが粉砕　４４－２１＝２３　残り２３点

「ぅくっ・・・・」

右腕に集中的に攻撃を受けるだけでなく、半分は自分のＥＭが空振りして当たった物であるレイカは、衝撃に耐えながら涙を流していた。

Ｂ２がゲームから取り除かれます。

第４ラウンド　１セグメント目開始

「姉さん！姉さん！姉さぁん！」

いち早く飛び出したチェルは、急いでレイカの下へと駆け付けようとＥＭを全速力で走らせた。それとは別方向にリリは向かっている。

チェル：Ｊ－４⇒Ｉ－８　Ｗ向き

リリ：Ｌ－４⇒Ｆ－５　Ｓ向き

「みんな・・・私、私も頑張らなきゃ！はぁぁっ！」

レイカは、疲れ切っている腕を無理に動かしてレバーを倒し、ヒートソードでＢ１を斬り付けた。その時の腕が、恐怖と怒りで震えていた事を、レイカは知る由も無かった。

敵回避値４＋補正値無し＝４　６＋４－４＝６　成功　Ｂ命中で１８点　胴に命中　３０－１８＝１２　残り１２点

「いい加減に・・・」

怒りからレバーを握る力が強くなっていたレイカは、同時に周りが見えなくなっている事に気が付けなかった。見れば直ぐ真横にはＢ

１が右脚のクローを展開して近づいて来ていた。この距離感では避ける事は出来なかった。

敵回避値５＋補正値無し＝５　７＋６－５＝８　成功　Ｂ命中で１０点　右腕に命中　未使用のバルカンがチューブを削り取られて使用不能に！　２３－１０＝１３　残り１３点

「私のハウンドレイジを・・・これ以上は・・・・傷つけ・・させない！」

クローによる衝撃を喰らったレイカは、ふら付く頭で何とか正気を保とうと必死になっていた。彼女の表情には余裕の印象が見られない。それだけ彼女の状態が悪いと言う事だろう。

第４ラウンド　第２セグメント目開始！

「姉さんは、私が助けるんだぁ！」

「チェルちゃん？！私も続かなきゃ！」

チェルが、誰よりも早く武器を手に取ってＢ１をガトリングガンで滅多打ちにしようとした。それと殆んど同タイミングでリリもラージレーザーを作動させていた。

チェル：敵回避値４＋補正値無し＝４　５＋９－４＝１０　成功　Ｂ命中で１６点　右腕に命中　１２－１６＝－４　Ｂ１撃墜

リリ：同時判定：敵回避値４＋補正値無し＝４　５＋４－４＝５　成功　Ｃ命中で１４点　左腕に命中　－４－１４＝－１８　Ｂ１轟沈

「この！この！このぉ！」

Ｂ１が沈黙、及び機能停止したのにも関わらずチェルはガトリングガンのトリガーから指を放そうとしなかった。次々と弾丸による凹みがＢ１を潰して行く。それでも尚、チェルはガトリングガンの弾

丸が尽きるまで撃ち続けていた。涙を流しながら。

次回に続く

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9271o/

エムブリオマシン～レジスタンス戦記～

2011年4月30日00時12分発行